

労協連だより

古村伸宏（日本労協連・事務局長）

長梅雨があけて夏本番、には程遠いぐずついで湿った夏である。しかし、自治体集中行動が今年は熱い。まだまだ局所的ではあるが、厚生労働省「雇用創出企画会議第1次報告書」のほか、全国で積み上げてきた実績をまとめた「企画提案書」が、期待をもって受け入れられている。そんな中、今年度の重点事業に上げた子育て支援を巡って、センター事業団が板橋区で認可保育園を運営することになった。その他にも商店街活性化や空き教室活用の学童保育や親子広場など、ひと昔には考えられなかった広がりである。こうした背景には、20年余の院内保育から在宅保育支援、そして自前の保育園へと夢見続けてきた、保育園事業所の組合員の粘り強い取り組みがある。「人が育つ」事に関わることは、自分をも育てることへと続く。高齢者介護に続いて、子育て支援は、「人が生きる・育つ」事へ直接関わる営みであり、ケアの心を持った「協同」のワーカーたちが活躍する舞台でもある。

沖縄では、10月の本番に向けケアワーカープレ集会在7/29に開かれ、目標を大きく超える300人余が参集し、沖縄のケア、自らのケアを語りあった。1000人目標の集会本番に向け、地元で所属を超えたケアワーカーの連帯とネットワークづくりが、しっかり根を持ちケアワーカー自身の手で結び始めた。こうした分野から、人間にとっての「労働」が見直されていくのだろうと予期させる。

自治体行動とあわせて、この時期は法制化後を見据え、各県にサポート機能づくりや連帯機能づくりを目指して、「全都道府県仕事おこしシンポジウム」を仕込む時期でもある。まだ取り組みの数は少ないが、内容的には可能性の目白押しである。佐賀では、昨年の九州協同集会の成功を受け、佐賀版協同集会の準備が始まり、その実行委員会から「ワーカーズコープをつくらう会」が立ち上がり、気運が盛り上がっている(9/20開催)。

また、埼玉では連合と組んで準備を開始し、早々に暉峻岡淑子先生に講演の快諾を頂き、NPOセンターの協力も得ながら準備が進んでいる(9/6開催)。埼玉では、センター事業団がインターンシップを受け入れている関係から、県の商工部雇用開発課へ宣伝等の依頼に行き、鹿児島から始まった職業訓練事業としての仕事おこし講座の委託事業の実績、商店街活性化などプロポーザル方式での仕事の受注やその事業内容の紹介を行った。県の担当者は大変関心を示し、事業委託に向けて事態が動き始めている。その中で、2つの興味深い話があった。一つは、最近の失業情勢は、即戦力の有技能者は道がまだある、しかし無技能者や一から育てなければならない若者の門戸がどんどん狭まっており、「育て、身につける」ところまで支援・保障できる組織であれば、特命で委託を検討するに値する、という話である。また、失業者が職につく・仕事を起こすための財源を県が用意し、労協が管理・運用することは考えられない

か、という「思いつき」と断った上ではあるが、新しいことを試行する意欲を感じることができた。それだけ事態は、大変革を必要としているのだろう。

法制化時代は、労協が公共性に高めていく時期であり、自治体との全く新しい、これまでとは異なる関係づくりの時期でもある。折りしも「住民参加型」行政の研究も総務省ではじまるという。我々にとっての公共性とは、住民の「暮らす」「働く」「生きる」行為を保障し高める事と考えたい。その中心は、「生きがい」「働きがい」へと結ぶ「育ち」「発

達」を大事にしあうということではないだろうか。そのためにも沖縄で感じた「運動」を作ることをもう1度捉え直したい。色々な柵をのりこえ、人間が運動に参加し交差する中で、人間性という幹を太くする、そんな人生を演出する労協でありたいと願う。

8月の戦火の教訓と最近の若年層・子供をめぐる悲劇・惨劇から、「生命」そのものへの思いと願いは募るばかりである。暑い夏、元球児の魂を再び燃やし、憧れの舞台へと「運動化」して進もう。

研究所たより 研究所たより

梅雨が明けて突然蒸し暑い夏がやってきました。昨年の夏は協同集会の準備で千葉方面をウロウロしていたのですが、今年は「新しい働き方を考えるシンポジウムinさいたま」の準備で埼玉方面をウロウロしています。

さて、前号の「たより」で少しだけ触れた、協同総研・日本労協連のイタリア社会的協同組合の調査の内容をお知らせします。9月15日に出発し、ローマのCGM系とは異なるCO.IN(統合協同組合)の本部を訪問、概要ヒアリングを行う予定です。CO.IN加盟のいくつかの団体のヒアリングや見学、またCGM系の社会的協同組合も訪問します。可能であれば南部のCO.INのプロジェクトも見学する予定です。9月21日にミラノに移動し、

Centro Risorse per L'impresa Sociale
社会的企業のための資源センター
LavorInt 労働を通じた社会参加促進のためのコンソーシアム
Agenzia Sviluppo Nord Milano 北部ミラノ開発等の研究機関を訪問する予定です。これら全てのスケジュールは都留文科大の田中夏子さんがコーディネートしてくださっています。企画の責任者は岡安専務です。

上記調査の日程に先立ち、8月29日～31日の第20回共同連全国大会(大阪市)に参加するためイタリアCO.IN会長のマウリツィオ・マウロッタさんが来日されます。協同総研理事の斎藤縣三さんや顧問の石見尚さんらが中心となり、東京近辺での講演会が企画され、協同総研も企画に協力します。

シンポジウム「イタリアの社会的協同組合にみる障害者の就労の可能性」

9月2日(火)10:00～12:00 参議院議員会館
(千代田区永田町)

時間が取れる方はぜひご参加ください。

8月1日(金)には、ワーカーズコープ・アスランの第4回総会に参加しました。アスランについては何度か報告していますが、編集プロダクションの倒産争議の中から生まれ、出版業界で働くフリーランスのネットワーク・仕事おこし組織として、3年前に設立されたものです。この3年は、出版不況の大波を受けながら、本当に厳しい経営を続けてきました。この経過の中で、これ以上赤字(借入金)が増えたら責任が取れない、出版業会の現状から見て、今以上に業績がよくなる展望が見えない、版元からの支払いが滞ったことでフリーランスへの支払いができなくなった「事件」があったが、またこういうことが起こると、版元とフリーランスの間にはさまれている編集プロダクションとしては責任が取れない、杉村(常勤)の過重労働が解消されない、このままの状態で継続すると、(フリーランスへの)料金面でも働き方の面でも、最初の理念とは違ったものになってしまう、等の理由から「アスランを解散した方がいい」という議論も出ていました。今年2月以降の理事会(菊地は団体組合員としての協同総研からの理事)では、その点を中心に討議を重ね、最終的には継続していこうという結論となり、総会でも承認されました。業界の抱える構造的な問題やワーカーズコープとしての運営の難しさなど、アスランは本当に多くの課題を抱えています。しかし、そんな厳しい中でも前向きに継続を

決め、新たな年度をスタートできたのは、中心となる杉村さんをはじめ、理事のメンバーがこのワーカーズコープに大きな希望を見ているからに他なりません。さいたまシンポで講演される暉峻淑子さんが言うような「連帯の経済」の実践は、こういうところから積み重ねられていくのでしょうか。協同総研会員の方々にも編集関連の仕事でのご協力をお願いします。

(アスラン HP <http://www.aslan-w-co-op.com/>)

(菊地 謙)